

♥♣♦♠ 仏教と道教のテーマパーク ♥♣♦♠ 岩田温子

山西省の省都・太原から車で南に下ることおよそ2時間、綿山は石灰岩からなる険しい渓谷に沿った観光地です。

介子推(jièzituī)(注1)という、2700年ほど前、晋(今の山西省にあった国)の君主に仕えていた人物の悲劇的な終焉の地として昔からよく知られていました。主君に忠を、親に孝をつくした介子推は、後に儒教の「徳」の鑑とみなされ、歴代の王朝の皇帝がたびたび参拝にやってきました。

またこの谷の険しさによって、修行の場として僧侶や道士たちが住みつき、寺を建て、古くから信仰の山としても知られていました。しかし、時代の推移とともに寺は廃墟となり、綿山は人々から忘れられた存在になりました。

1995年から、この綿山を新しい観光地として蘇らせる事業が地元出身の炭鉱会社社長によって始められました。仏教の信仰、道教の道德教育、そして自然環境に親しむ要素を取り入れたテーマパークとなり、毎年60万人もの人々が訪れています。

綿山は大きく4つの部分に分かれています。渓谷の入口近く、「大羅宮」という道教の寺と、復元された唐代の軍事基地を中心とした「龍脊嶺景区」、その奥の「雲峰寺」と即身仏のある「正果寺」を中心とした「高山遊覧区」、介子

推の墓を中心とした「介公嶺景区」、そして一番奥の、渓流に沿ったハイキングコースがある「水濤溝景区」です。

「大羅宮」から「雲峰寺」の間のお寺を結ぶ歩道は適度な上り下りのあるハイキングコースで、深い渓谷や向かい側の山の景色も楽しめます。そして、「大羅宮」と「雲峰寺」は岩壁に寄りかかるように、楼閣を上へ上へと何層も積み重ねて建てられ、その建築様式には圧倒されます。「介公嶺景区」には山の上の介子推のお墓の他に、介子推の死を悼んで始まった「寒食節」(注2)という行事に関連の資料館があり、道德教育の場となっています。渓谷の一番奥の「水濤溝景区」では、片道4キロの花崗岩の渓流沿いの緩やかな起伏に富んだ道を歩いて、森林浴が楽しめます。

(注1)介子推：後に春秋五覇の一人に数えられる晋の重耳が、内乱によって諸国を放浪している時より仕え、陰ながら重耳を支えた。重耳が晋公の位についた後、母を連れて綿山山中に隠栖し、死ぬまで世に現れなかった。

(注2)寒食節：晋公が介子推を呼び戻すために綿山に火を放ったが、介子推は現れず母親とともに焼死したのを悼んで始まったといわれる。

※何媛媛来信(「わんりい」HP)「寒食節と綿山」もご参照ください。

♥♣♦♠ 綿山を楽しむ ♥♣♦♠

小林慶子

■到了綿山

私達のバスが綿山を登り始めた時、外は大粒の雨、空は遠くまで煙っていて眺望は全くなし。翌日の天気予報も雨。予定通りのハイキングはできないでしょうと全員が思った。ひとまず各自部屋で荷物を解き、夕食前に集まって予定をどうするか皆で案を出し合い相談した。

翌日早く目がさめカーテンを開けてみる。いい天気。深い谷を目前に、切り立った石灰岩の岩に張り付くように建っているホテル「雲峰野苑」からの眺望も絶佳。胸が躍る。

■栖賢谷ハイキング

バスでホテルから5分位の所、封候亭というところから登り始めた。ガイドの郝さんが、簡単に「どうぞ」と言う声で歩き始めた。が、登り始めるといきなり、轟音の滝の脇に斜めに掛けられた粗末な梯子。鎖の手すりに掴まりながら恐る恐る進んでいく。足の下は滝から流れ落



ホテル・雲峰野苑は、由緒ある寺「雲峰寺」に隣接している



急斜面の狭い谷に延々と続く梯子(撮影：岩田)

ちる水が大きな岩にぶつかり狭い谷に反響して凄い音がしている。

両手でしっかりと鎖を持って一歩ずつ足元を確かめながら落ちる恐怖と戦って登ってゆく。滝を登るとまた滝。肩すれすれに滝が流れ落ちる。梯子は滑りやすく緊張が小一時間ほど続く。よくもまあ、こんな急斜面の狭い谷に杭を打ち、梯子を取り付けたものだと感心した。スリル満点のこのコースはもう一度挑戦したい。

すいとうこう

■水濤溝ハイキング

午後からは水濤溝へハイキング。ここは遊歩道が整備された、大勢の家族連れで賑わう観光地だ。溪谷に沿って奥に進むと滝が現れたり、岩や木々が水に映り美しい景色を見せてくれていた。突然、流れの中に恐竜の派手なオブジェが2体(テラノザウルス、イグアノドン?)、更に、龍やワニといった様々なオブジェが次から次へと現れる。自然のままで十分美しい溪谷になんという心無いオブジェ。これには何とも興ざめした。

一番奥の水簾洞では、滝がカーテン状に流れ落ち、その裏側に入れるようになっていた。メンバーの一人は勇敢にも滝の脇の滑りそうな道をつたわって滝の裏側に入り、私たちに手を振ってくれた。中には三体の石の仏像があったそうだ。



美しい流れの中に突如として、恐竜や龍、そしてワニなど様々な原色の動物が現れてビックリ! 子連れの家族や若者のカップルも多いところだけれど、何もなくとも美しい溪谷だけにもったいない。

(水濤溝撮影：沖田辰夫)



■雲峰寺

ホテルの6階テラスに続く雲峰寺は、石灰岩の大きな洞窟に明代建立されたお寺とのこと。洞窟上部の岩肌には大きな鈴が無数にぶら下がっている。サオなどの道具を使ってもとても取り付けられる位置ではない。

お参りする人達の中には願いごとがあると、このお寺で大きな鈴を買い求め奉納したりするのだそうだ。その奉納の仕方がとてもユニークだ。お寺のお坊さんがこの鈴を抱えて、洞窟上方の切り立った岩に登り、自分の体にロープを巻きつけ、岩の上から宙吊りになって下りてくる。そして、ロープでしっかり縛った体を2度、3度大きく揺らしたかと思うとその反動を利用して岩壁に打ち付けてある杭に鈴をひっかけるのだ。

大勢の観光客と一緒にこの一部始終を息を呑んで眺めた。まるでスパイダーマンのような身軽さである。終了すると懐からバクチクをとりだし「バン、バン、バン」となりしロープをのぼしてスルスルと地上に降りた。地上に足がついたとき、誰しものがホッとして拍手が起こった。料金は鈴と取り付け料を全部ひっくるめて1640元とか。



垂直に切り立った崖の中腹に大鈴を取り付ける
(撮影：小林慶子)